

## 6代小十郎の死亡記事（明治44年4月9日付扶桑新聞）

恰ほとんど二ヶ月 胃がんにて病褥じぶくありし當市の服部小十郎氏は 遂に  
薬石やくせき其効そのこうなく 昨八日午前九時 遂に 永眠せしが 享年五十二歳  
惜しむむべきの至りと謂ふべし

○奥田系の辣腕家らつわん 氏は万延元年三月廿四日當市とうに生れ 久しく名古屋  
屋實業界じつぎょうかいの要位置よういちにあり 夙つとに奥田系の辣腕家として嘖嘖きくきくの名あり  
奥田翁の手によりて會社かいしゃの新設さるるものあれば 氏は必ず  
重役の一椅子いむを占るを例とせしが 去る三十五年の總選舉そうせんきよに當て  
は 推されて代議士となり 日露戦役の功に依り 勲四等に叙せ  
られたり 同氏は自ら木材商を營みて 「板小」の信用 市の内外  
に昇り 更に左の要職にありたり

名古屋商業會議所かい議員、名古屋電取締役、愛知セメント會社かい取締役、  
名古屋瓦斯會社がす取締役、中央炭鑛會社たんこう取締役、豊川鉄道會社がす取締役、  
名古屋株式取引所監査役、豊橋瓦斯會社がす監査役

○症と奮闘す 氏の胃癌を病むに至りしは 四十三年にして 其到底  
餘命よめいの久しからざるを知るも 關係會社がんけいかいしやの總會そうかい前に至れば 必ず

病軀を押して 連日 出社し 熱心に其職責を盡すに方め 殊に  
愛知セメント會社に於いては 無報酬の重役 なりしも 社長は  
高島嘉之助氏にして 横濱に在るより 氏は親しく 屢々出社し  
能く同社をして 今日あるに至らしめたり

○議員としての服部氏 又 四十年十月三級選出により 市會議長と  
なり 現議長井上茂兵衛氏の前に議長たり 議場の整理に其の辣  
腕を揮ひ 上遠野富之助氏の後を襲ふて尚ほ能く適任者を以て稱  
せらるゝ者ありしが 昨年は病軀の爲 殆ど出席する能はざるに至  
りたり 又 氏は商業會議所創立發起人の一人にして明治二十三  
年十一月頃東奔西走其設立に盡力して目的を貫徹し 當時の  
發起人實に四十三名何れも當市商業界の有力者のみなりしも 創  
立當時より今日迄繼續同所の議員たるもの僅か六人にして 氏は  
實に其の一人たりしなり

○敵も味方も多し 氏は萬事に一刀兩断の擧に出づる性質なりしを以  
て 深く氏を敬慕せるものゝ多かりしと共に 亦 敵も随つて多  
かりし如し

○千里眼の透視 昨年胃癌の診断を受くるや氏は熊本に至り千里眼婦人御船千鶴子の透視を受けんとせしが 幸ひ千鶴子の來名を機とし同氏宅にて同女に透視せしめたるに胃癌にはあらずとのことなりしも 是れ誤診にて全く胃癌ありしより 常に人に語るに胃癌は不治の病にして従来の例によれば初發後二年の命を保つもの也 四十四年七月は是れ恰も二年目に相當す 期至らば大往生を遂ぐべし等の言を以てし 密かに七月を待つものゝ如く 一兩月前よりは來訪者あれば必ず快く面會して元氣に對談し 先月兼松熙氏の訪問に接するや 三味線弾三太郎を招き自ら颯々として歌澤の一曲を唱せしが 其半ばに達するや「モーいかぬ」と呵々大笑して之を輟めしが 遂に七月に入らずして逝く 悲哉

○盆栽と骨董 生前氏は好んで盆栽を愛して殆んど玄人の域に達し餘裕だにあれば園藝を楽しみとし忙中閑をおさむるに方め 又 骨董に就ても多大の趣味あり 蔵する所の名畫珍軸亦すくなからずといふ

○遺骸の解剖 氏は去る四月特に主治醫森田醫學士を招き氏の癌腫にして若し之を保存し置くに於て醫學上の参考たるを得べしとなら

ば同醫學士に贈るべきを以て死後遺骸を解剖に附せられたしとの  
意を告げたるより 同學士は是れ素より望む處なりと答へしに  
直に家族を集め其意を告げ 且つ 解剖の際熊谷院長を立會は  
しむるのみにして決して家族を其室に入らしめず 且つ 解剖は  
病院に於てせずして服部氏の自宅に於てせられたき旨を森田學士  
に託したり

○立派なる大往生 氏は死に臨む事 恰も歸する如きの覚悟を定め  
如何なる高僧と雖も 到底氏に及ぶ能はざるべしと思はるるま  
での大安心を得たるもの々如く死後の措置に關しては細大漏らす  
無く遺言し 豊替を行ひて會葬者を迎ふるの準備までをも家族に  
爲さしめたり

○遺骸は大喪 氏は又二十年後の名古屋市は墓地を市中に存置する能  
はざる繁榮に達すべきを以て 其際 改葬の爲め 墓を發かるる  
は 快しとせざるところなれば 遺骸は火葬に附せられたき旨を  
も遺言したりといふ